与していた医師であった。なお、地元富山から金沢と関係なく任用されたのは、織田秀教（長崎医学校）、赤祖父義正（大阪適塾・長崎医学所）、楠香居（京都時習堂）の三名であったと思われる。

（金沢大学医学部）

34 中国古来の「医学保健体操的導引」にみる系統的解釈について

坂本　秀治、○市川　太郎

中国古代の墳墓が発掘されて、古代文献が大量に発見された。その中に帛及び木簡に記された、導引図と名付けられた絵図が含まれており、そこには多くは裸、裸足で中国古代伝統の運動範式を物語る男女四十四型の導引動作が描かれており、学界の注目をひいた。

長寿社会となって健康管理の叫ばれる現在、数多くの種類の体操法が存在するが、古代中国にもこれに匹敵する位多くの種類の、仙人達によって創案された体操法が存在したとされる。この他にも道教書に詳述された体操法が数多くある。古代にもかなりこういった養生法が普及していたことが窺える。

色々の種類のものが混っていて、順序もなく、目的に

応じて適宜ピックアップして行われたと考えられる。

こうした総体の中から、修行者の各自がそれぞれの修業結果に応じて幾つかの要素を適宜選択した。恰も高名な神仙家達により伝えられた丹薬を処方するかのように調合された。ちょうど現代の医者が薬剤を処方調合して投薬するように。このように導引は道教徒の生活とは密接不離であり、導引体操と道教的実践活動とは一体であった。

この導引図に描かれている動作図に基づいてこれらを適宜組合わせて、現代医学的生理心理学的認識の下に中国古来の〝医学保健体操的導引〟を現代的に系統的運動医学に再構築する試みが中国の学者達によってなされている(伯西周。故宮文物月刊)。これによると導引の運動医学の系統は「九寿操」と名付けられ、その系統は次のようになっている。

一、導気

㈠胸部の「深呼吸」　図6　図15

㈡腹部の「深呼吸」　図16　図23

導気の作用を化学作用(胸呼吸)と物理作用(腹呼吸)によって現代医学的に究明付けようと試みられた。

二、引　体

㈠頭部の運動　図12

㈡上腕部の運動　図2　図7

㈢胸部の運動　図10　図25

㈣腰部の運動　図5

㈤背部の運動　図8　図21

㈥腹部の運動　図20　図26

㈦下腿部の運動　図9　図28

導気二項、引体七項の各運動に割り振られた操作図に、それぞれ運動操作法が具体的に現代医学的につけられ、さらに治療効果が西洋医学的手法で記述されている。「気」を酸素におきかえて、現代医学的に展開されている。

各操作法の冒頭には運動理論家「荘子」、実践家「葛洪」の説が引用されて、根底には道教的理論の存在を強調し道教的色彩を強くし、恰も道家の実践を想わせる。

しかし、登仙した道士にとって不死身となるための、合目的な呼吸術を行う場合の「気の巡路」の説明には全くなっていない。簡単に化学作用(胸呼吸)と物理作用(腹

呼吸）に分類する位では割りきれないと思われる。

三、動作法について

帛画に描かれている動作図には病名をテーマにするもの（一類）、動物の形をテーマにするもの（二類）、器具を用いるもの（三類）、そのたに属するもの（四類）とあり、一部病名動物名などの記載が認められるだけで動物の操作法は付けられていない。従って分類後各動作に現代医学的に操作法と治療効果がつけられている。

しかし前述して指摘したように、この種の動作図は普遍的な強身保健の目的をもち、特定の一つの限られた疾病を治すためのものではない。道教的実践活動の趣旨から考えても西洋医学的生理学の系統の枠の中に、無理にはめこむことの方が不自然ではないだろうか。

（南小岩接骨院）

35 呪禁師（じゅごんし）の実態

――律令制下の呪術医療者――

稲垣　直

古代日本の医療水準が、帰化人によるシナ本土からのすぐれた医療技術の導入の結果、飛躍的な向上を示したことはすでに熟知されているところであるが、それは近江令（その存在を否定する学者もあるが）から養老律令に至る律令体制の確立とともに、内薬司および典薬寮などの形で具体化されるに至った。

典薬寮の傘下に医師、薬園師、按摩師の存在することは当然であるが、それらと並ぶものとして呪禁師ないし呪禁博士の設置が注目される。

呪術医療のこのような形での官制化が唐の律令の直摸であることは『大唐六典』その他の文献によって明らかであるが、我が国に於いては『続日本紀』神護景雲元年